

令和〇年(少)第〇〇号 殺人未遂保護事件

意見書

令和〇年〇月〇日

福岡家庭裁判所少年部 御中

少年 〇 〇 〇 〇

付添人弁護士 福岡 九州男

上記少年に対する頭書保護事件について、少年法22条の2に基づく審判手続への検察官の関与に対する付添人の意見は、下記のとおりである。

記

第1 意見の趣旨

本件の審判に検察官が関与することは不相当である。

第2 意見の理由

- 1 本件非行事実、少年が被害者の頭部を鉄パイプで複数回殴打し、全治1か月の重傷を負わせたというものであるところ、検察官は、捜査段階での少年の供述内容・供述経過等から、少年が、家庭裁判所において、故意を争うことが予測されるとして検察官の関与を申し出ている。

しかしながら、以下のとおり、検察官のかかる関与申出には理由がない。

- 2 非行事実になきな争いが存在せず、検察官関与の必要性のないこと
 - (1) 検察官は、犯行に至る経緯等について争いがあり、少年が、殺意を否認する可能性を関与の必要性の理由として挙げる。

しかし、以下のとおり、本件においては検察官が関与する必要性はない。

- (2) まず、少年の供述内容に関して言えば、少年は、被害者に対して、少年の周囲に煽られて非行に及んだに過ぎず、そこまで強い恨みを持っていなかった旨を述べることはあったものの、一方で、少年が鉄パイプを頭部にめがけて打ち付ければ、被害者は死ぬかもしれないと思っていたと供述している。

そのため、少年は、少なくとも未必の故意については認めているのであるから、本件において、殺意の有無については争いがない。

- (3) また、少年の供述態度にしても、少年は、逮捕当初から一貫して、被害者に対する殺意を認める旨の供述を繰り返し行っており、審判において突如として供述を変えらることも考えられない。
- (4) その他、少年の供述調書やその他の送致記録によって、非行の態様等は客観的にみて、すでに明白であって、これらが争いとなる余地は全くない。
- (5) 以上より、本件における非行事実の認定にあたり、検察官が関与する必要性は存在しない。

3 検察官を関与させることによる弊害が大きいこと

- (1) 少年は、いまだ16歳であり、一般的に、捜査官の取調べに対する迎合性、被暗示性が強い。本件においては、捜査機関による連日の取調べを受けたことによって、検察官から問いただされることに対しても恐怖感をもっている。

このような少年が、審判の際に、検察官から糾問的な質問や弾劾的な質問を受けた場合には、少年の情操に与える悪影響をは極めて大きく、ひいては本件について内省を深める機会すら奪ってしまうことになりかねない。

したがって、本件において、検察官を関与させることは、少年の健全な育成を期すことを目的とする少年法に反する結果となる。

- (2) よって、本件において検察官が関与することの弊害は大きい。

4 結論

以上のとおり，検察官の審判関与の申出は，必要性を欠くものとして要件を満たさず，かつ，少年法の目的に照らし不相当である。

よって，本件の審判に検察官が関与することは不相当である。

以 上